
神喰 - カミクイ -

戦国アサシン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神喰 - カミクイ -

【Nコード】

N0188Z

【作者名】

戦国アサシン

【あらすじ】

少年、喰淵呉羽が『あいつ』に出会う時、少年は神をも食す貪欲な存在へと、成り上がり、成り下がる！！これが新たな神話劇！とか格好つけてみたりして（笑）

『お主は儂を、愛して食せ』

一話 二年三組（前書き）

小説を読む上で。

この小説には神が出てきますが、全く実在しない神ですので、そこは理解しておいて下さい。

だって僕、神話とか大して詳しくないので。

それでも良ければ、是非読んでください、

あ、あと、文章力低くてすいません（・・・）

一話 二年三組

「僕の最大の失敗はお前と出会った事。

僕の最大の成功はお前を助けた事だ」

「僕の最大の成功はお主と出会った事。

僕の最大の失敗はお主に助けられた事じゃ」

僕達は向かい合い、互いに呟く。

あいつは僕を、僕はあいつを否定するように。

あいつは僕を、僕はあいつを認めるように。

二人を打ち消し合うかのように、僕とあいつは呟く。

なぜなら、僕達は二人で一つだから。

僕達は一心同体だから。

僕が欠けても、あいつが欠けても。

それだけで、僕はあいつで無くなるし、あいつも僕で無くなるのだ。

あいつは僕で僕はあいつ。

僕はあいつであいつは僕。

僕は僕であいつはあいつ。

あいつはあいつで僕は僕。

それだけのことなのだ。

そして僕達はもう一度互いに呟く。

確かめるように。

愛でるように。

綻びを紡ぐために。

もう一度呟く。

「僕はお前を」

「僕はお主を」

「「愛してる」

愛の言葉を、だ。

桜縞市おうしまの、公立坂上学園にて。

夕焼けの光が差し込む二年三組の教室の中、会話を交わしている少年と少女がいる。

一方は、僕こと喰淵呉羽くいぶちくれは。

人を信頼しない事に置いて、絶対的な自信を持つ、嫌な男で、そんな嫌な男に友達が多い訳が無く、友達の数は十に満たない。

けれど、そんな僕の数少ない友達と、今会話してるわけだ。

まあ、今日は学級委員の仕事として、話し合いをしてるだけなんだけどな。

「提案なんだが、帰っていいか？」

僕は、唐突に提案する。

しかし、そんな提案が通るわけもなく。

「ダメダメ。任命されたからには、しっかりと職務を全うしましょうねー」

あっさり却下される。

まるで子供をあやすかのように僕の提案を却下したのは羽翹白鶴はねはねしつうぱくかく。

睫毛が長く切れ長な目、女性にしては高い背丈、他の女子より一回り大きいバスト、細い手足、透き通るような肌、そしてなによりポニーテール（僕はポニーテールが大好きなのだ）。正に、美しさに置いては右に出る者がいない、少女。

名前に劣らぬ、美貌持つ少女。

それが鶴なのだった。

鶴は、小学生の頃からの付き合いで、所謂幼馴染み。

それ故、僕も彼女を信頼し、彼女も僕を信頼している。

絶対的な、信頼関係が築かれているのだ。

「任命ね……。僕の場合は、任命というより、押し付けっるのが正しいんだろうな」

鶴は圧倒的な信頼と支持を得て学級委員に任命された。

けれど僕は、圧倒的な信頼と支持のなさによって学級委員を押し付けられたのだ。

任命ではなく押し付け。

ここには大きな懸隔があり、埋まるはずもない溝があった。

だからと言って、僕は何も感じないけど。

信頼されない事と、信頼しない事には慣れているのだ。

「呉羽は本当にネガティブだよ。良く考えてもみなよ。その御蔭で、私と同じ委員会に入れたんだよ？どう、嬉しいでしょ？もっと物事をポジティブに考えようよ」

「ポジティブねえ……」

お前みたいに、ポジティブになれたら苦労しないよ、とは言わない。

言ったらまた、ポジティブな事を言われるだけだ。

ポジティブさでも、右に出る者がいない少女が鶴なのだ。

「僕には、無理だよ。僕は、ほら、あれだ。人生を楽しく考えようとか、そう言う概念が無いんだよ。人生に楽しみを見つける事に、絶望した人間だからさ。希望を見出す事に、絶望した人間だから。ポジティブとかネガティブとか、そういう問題じゃないんだよな」

「分かってるよ。分かってるけど、そんな呉羽だからこそ。……私は楽しみを知って欲しいんだよ。何かないの？これは楽しそうだなあ、とか。これは楽しいだろう、とか。そうやって思える物が、何かないの？」

「楽しい事、ね」

言われて僕は少し考える。

だけど、考えれば考えるほど、楽しい事は思い浮かばず、むしろ今までの辛いことや悲しい事を思い出してきてしまった。

ああ、あんな事もあったなあ。

思い出すだけで心が挫けそう。

いやもう、挫けてるのかもしれないけど。

そんな僕に見かねたのか、鶴は口を開く。

「こ、これはあくまで例だけど！本当に本当に例だけど！具体例でしかないんだけど！具体例以外に他ならないんだけど！わ、私が思うにはですね！こ、ここここここここ、恋とかが良いんじゃないやないでしょうか！決して私が恋したいとかそういう訳ではなく！ただの具体例でしかないんだけどね！」

「鯉？」

「そ、そういうお決まりの勘違いは良いから！いや、勘違いしてもいいけど！いや、やっぱり勘違いしないで！でもでも、やっぱり勘違いして！」

顔を真っ赤にして、慌てふためいて叫び散らす鶴。

はっはっは。

急がしい奴だ。

何に急いでいるのかは、僕には分からないけど。

それにしても、恋か。

故意でもなく、鯉でもなく、恋。

つまり恋愛って意味なんだろうけど、生憎僕は恋愛とは対極的な位置にいる人間なんだよな。好きな人とか、できたことないし。付き合ったことないし。ラブレターも貰ったことないし。バレンタインデーには、鶴か妹達の義理チョコしかもらえないし……。

やばい。

どんどん暗い気持ちになっていく。

暗い気持ちのまま、僕は呟く。

「特に興味なしかな……」

「そっか……」

僕と同じような声色と声のトーンで、鶴も呟く。

なにやら、というか明らかに落ち込んでいるようだ。

それほどまでに、僕の事を慮って恋愛という具体例を出してくれ
たのか。

優しい奴だよ、お前は、本当に。

僕は慰めの意味を込めて「ありがとうな」と言いながら鶴の頭を撫でる。

ふんわりとした感覚が手の中いっぱい伝わる。良い髪してるよなあ、こいつ。サラサラでふわふわで、撫でていて安心するというか、なんというか。とりあえず良い髪だ。

僕がそんな事を考えている内に、鶴はみるみる顔を真っ赤にし、顔が先ほど以上の赤身を帯びた辺りでボン、という音を立てて爆発した。

「うわっ、熱っ！」

あまりの熱に、僕は手を離す。

こいつ、どういう体の構造してやがんだ。

顔が真っ赤になって爆発する人間なんて、万国共通お前だけだぞ、多分。万国を見てきたわけではないから、絶対そうとは言えないけど、ほぼ間違いないだろう。

顔面爆発女。

うーん、文字にして表してみると、ただの化物だなあ。

「にゃ、にゃにして、頭にやでて、あ、ああああ、頭、にゃ、にゃんで頭にやでて、ああああああ」

完璧に故障、いや暴走した鶴。

あ、痛い、痛いから物を投げつけないで！

「お、落ち着けて！物を投げるな！痛いから、落ち着けて！なんだ、もう一回名でれば直るのか！？」

と思い、もう一度僕は頭に手を伸ばす。

すると、手をパシッと叩かれた。

「女の子の！頭を！勝手に撫でたりしちゃだめなの！分かった！分かんなかったら、今度は机ごと……」

と言いながら立ち上がり、机を持ち上げる鶴。

だれだよ、美しさに置いて右に出る者はいないとか言った奴！

可憐じゃねえよ、美麗でもねえよ！

野蛮だよ、こいつ！

「わ、分かったから！机を置け、とりあえず置け！」

机を置いて、椅子に座りなおす鶴。

「分ければ良いのよ、分ければ」

「どうやら落ち着いたらしい。」

「いやあ、恐いもん見た。机を持ち上げる女子とか見たことなかったからなあ。おそらく、今後見る事も無い。というか、今後見たいとも思わない。」

と、思った所で。

僕は時計を確認する。

「もう六時じゃん。鶴、帰ろうぜ。もう下校時間だ」

時計の針は六時五分を刺していた。五分オーバーだが、細かい事は気にしない。

「ほんとだ。もうっ、呉羽がふざけるせいで時間通りに終わらなかつたじゃん！」

.....。

完璧に自分の暴走を棚に上げてやがる。もう忘れている節さえある。

まあ、別に良いんだが。

続きを明日に回し、テキパキと片付けを終わらせ、書類を鞆に詰め込み、僕達は教室を出る。

階段を下り、下駄箱で靴に履き替え、校門の近くの駐輪所に停めておいた、自転車に僕は乗る。

「じゃ、また明日な」

そう、僕達はここで別れるのだ。

僕の家と鶴の家は正反対の位置にあるのだ。僕の家から鶴の家までは、およそ一時間はかかる。だから、遊びに行く時が非常に面倒なのだ。

まあ、最近は遊びに行つてないけど。

「じゃーね。また明日」

そう言つて、僕達は、手を振りながら別れた。

また明日。

今日は月曜日。

明日は火曜日。

僕の一週間は、始まったばかりだ。

一話 二年三組（後書き）

『大切なのは弱さゆえの向上心』 by 草摩杞紗

こつやっつてあとがきで、僕の大好きなマンガや偉人の名言を残していきたいと思います。よろしければ、こちらも呼んで下さい。
ちなみに今回は、フルーツバスケット！

二話 喰淵家の双子（前書き）

ふふふ。どうでしょうか。実は僕、変態なんですよ！と言っ訳で二話目です。主人公のキャラ定まらねー。みたいな感じですが、よろしければ読んでください。

二話 喰淵家の双子

僕の家には、双子の妹がいる。
双子だ。

本当に双子。

中学生の双子の妹。

見た目も声質も背丈も体重も、何もかも同じな、本当の双子。
二卵性でなく一卵性な、僕の双子の妹達は、横暴さ凶暴さ乱暴さに定評がある。かと言って不良という訳ではなく、学校では生徒会長と生徒会副会長を務めてたりする奴らだ。

僕とは違い、人望が厚いのだ。

まあ、あいつらが生徒会に所属している中学なんて、死んでも通いたくないし、想像するだけで吐き気を催しそうだ。

僕はあいつらが苦手だが、決して嫌いではなく、むしろ信頼している。

それは、兄妹だからという理由もあるし、あいつらが陰でこっそり人助けをしている事を知っているからだ。

たとえば、子供が車に轢かれそうになった時身を呈して守ったり（その際、逆に車が破壊された）。

たとえば、電車でお祖母ちゃんを席に座らせるために、有先生気に座っていたを半殺しにしたり（その時は、さすがに警察沙汰になった）。

やりすぎ、な所もあるが基本的には人のためにした行動なので、僕は意外と尊敬したりしている。

お祖母ちゃんのために不良に喧嘩を挑むとか、マジかっけーっす、という事だ。

「けどまあ、このドアを開けた先にあの妹二人が待っていると思うと、僕はただただ立ち竦むしかないんだよなあ……」

我が家の前で、軽くため息を吐き、僕は呟く。

どうせ今頃、このドアの向こうで僕の帰りを待っているに違いない。

奇襲という形で、僕は帰宅を歓迎されるのだ。それが、リビングで五月蠅くはしゃいでいるか、のどちらかだろう。

近所迷惑って、また僕が怒られるじゃないか、全く。といっても、僕の家は田舎中の田舎みたいな場所にあるから、周りに家なんかないだけだよ。

百メートル先にある家が、一番のご近所さんなのだ。

ちなみに、家に両親はいない。三年ほど前に、事故で亡くなった。多分父さん達がいたら、もう少しましな人間に育ったんだろうけど。今さら言っても、後の祭りか。死んだ人間は、文句を言っても戻らない。

僕は決心して、ドアを開ける。

「ただいま」

と、そこで拍子抜けする。

家全体が静かなのだ。まるで、誰もいないかのような静かさだ。

おかしいな、この時間帯ならもう帰ってるはずなんだけど。それとも、友達の家で遊んでるのか？なんだろう、この違和感的な物は。なんか、この静けさが逆に怖いなあ。

そこで僕は考えを辞めて、ドアを閉める。

ぶつちゃけ、どうでも良いのだ。いなければいけないで嬉しいし、いればいるで変わらない。

靴を脱ぎ始めた。その、と、き、だ、っ、た！

「油断したな！この馬鹿兄ちゃん！」

突如、大声と共に僕の腹部に突進してくる、二つの物体、基、僕の妹達。声も突進も息ひびつたりである。

油断していたせいもあり、僕は避ける事も出来ずドアにぶつかる。

「ぐえっ！」

と情けない声を出し、頭部を強打する。というか、全体的に強打する。

痛い、超痛い。

けど、そんなことより！

こいつら、時間差攻撃を使って来やがった！

僕が家にいないと、そう錯覚した瞬間を狙って突進してきやがった。なるほど。先ほどの静けさは、嵐の前の静けさ、と言う奴だったのだ。くそう、完璧油断してた。てか、こいつらの策に見事引っかけってしまったってのが何よりもムカつく。

こんな奴らに、一本取られるとは！

二人は僕の上に馬乗りしたまま『してやったぜ』みたいな笑みを顔に浮かべてやがる。

「ふっふっふ。わたし達の策に引つかかるなんて、まだまだだね」「ふっふっふ。あたし達を舐めてかかるからそうなるんだ」

別に舐めてるつもりはない。そう言おうと思ったけれど、今のこの状況で言っても負け犬の遠吠えだ。こいつらをより一層喜ばせるだけだ。

だからここで、こいつらの自己紹介に入ろう。

一人称がわたしの方。

喰淵姉妹が長女。

天衣無縫の喰淵木葉。

柔道剣道空手道の有段者で、その他多くの格闘技を嗜んでいる。

現在中学二年生。

木葉の通う、酒山中学の六二代生徒会長。

総合格闘技部所属。

髪型は髪を右側で縛る、サイドテールなるものだ（僕がポニーテールに次いで二番目に好きな髪形）。

そして、一人称があたしの方。

喰淵姉妹が次女。

天下無双の喰淵篠葉。

柔道剣道空手道の有段者で、その他多くの格闘技を嗜んでいる。

篠葉の通う、酒山中学の六二代副生徒会長。

総合格闘技部所属。

髪型は髪を右側で縛る、サイドテールなるものだ（同じ説明は省かせてもらう）。

髪型、体型、顔立ち、声質、性格。全てが全て同じで見分けるためには、一人称で見分けるか、右目の下に黒子があるか無いかで見分けるしかない。

黒子があるのが木葉。黒子が無いのが篠葉。

まあ、僕ぐらい長く住んでいると、ちよつとの声の違いとかで分かっちゃうんだけどな。木葉は少し高く、篠葉は少し低いのだ。ほとんど差はないけど。

……………。

なんでこんな面倒臭い双子を産んだんだ、僕の親は。

「兄ちゃん、自己紹介ごときで、ごまかせると思ってるの？」

木葉の方が、僕にそう尋ねた。

そんな事、毛ほども思ってたかったけれど、どうやら木葉にはそう見えたらしい。

ていうか、心の中で自己紹介してたのに、何故僕がお前らの自己紹介をしている事を知っている。心の中を読むな、心の中を。

「あたし達は武道学んでるんだよ？心の中を読むなんて簡単だよ」

篠葉の方が、自信ありげに言った。

何それかつけえ。って、そうじゃなくてそんな訳あるか。武道やってたら、心読めるようになるとか、どんなライトノベルだよ。リアルとライトノベルをごちゃ混ぜにするな。

「ふふふ。ここはライトノベルの世界なんだよ、兄ちゃん」

こっちは篠葉。

「そうなんだよ。だから心の中を読めても何もおかしくないのだ！」
こっちは木葉。

次から面倒くさいから、台詞の最後に（木）とか書いておく事にしよう。うん、それが良い。

話は変わって、だ。

な、なんて言う事だ。

僕はいつの間にか、ライトノベルの世界に交じりこんでいたらしい。気が付かなかった。本当に、全然気付かなかった。

「そんな事はどうでも良い。それよりお前ら、何処に隠れてやがった。玄関に隠れるとこなんて一つも無いぞ」

「ふふふ、わたし達はここにいただけ（木）」

「兄ちゃんが、それに気付かなかったただけの事（篠）」

「だからそういうライトノベル風な言い回しやめろ。そこにいただけ、とか、そんなわけねえだろ」

そんな事できるなら、風呂場とか覗き放題じゃないか！

とは、決して考えない。

何故なら僕は、変態ではないから。

決してそんな能力があつたらなあ、とかは考えない。

絶対にだ。絶対にだ！

「兄ちゃんがエロい事を考えてるのは放っておいて（木）」

こ、心を読むなバカ！ていうか考えてねえよ！

「まあ実のところ、武道を学ぶ過程で、気配を消す術を覚えた、って言うのが答えなんだよね（木）」

「そうそう。透請術って言うんだよ。あたし達が命名したんだけど

（篠）」

ふーん、なるほど。それはすげえな。色んな事に役立つ。

たとえば、更衣室に入り込んだり。

たとえば、女湯に入ったり。

たとえば、女性専用車両に這入ったり。

ふふ。

妄想で胸が膨らむね！

僕も武道を学んでおけばよかった。

とは、決して思わない。

何故なら僕は紳士だから。

ジェントルマンだから。

レディーファーストの精神を持つ、ジェントルメンだから！

「ちなみに、邪な気持ちがある人間には、武道は身につかないよ。

正々堂々、が武道の精神だからね（篠）」

「つち」

と舌打ちしたのは僕だったか。それとも誰だったのか。

それは誰にも分かる事はないし、分からなくて良い事だ。この世には、知らなくて良い事と知らなければならぬ事の一つがある。

先ほどの舌打ちは、明らかに前者だろう。

知らなくて良いのだ！

話をそらすために、僕は話題をかえる。

「おい。武道は正々堂々の精神なんだろう？ だったら透身術なんて使
うなよな。卑怯だろうが」

「師匠様がね。『正々堂々卑怯な事をするのは、卑怯な事じゃねえ。
卑怯な事つてのは、卑怯な事を隠したままやる事なんだよ』つて言
つてたから。わたし達はあくまで、正々堂々卑怯な事を使ったんだ
よ（木）」

木葉の言う師匠様つて言うのは、木葉と篠葉がお世話になってい
る立花道場の師範代の事で、名前を立花湊たちばなみなとという。

この人については、何も語りたくも無いし語る事はない。

僕が言える事は、お祖母ちゃんに信号を渡らせるために道路の車
をあらかじめ破壊する、ぐらいの事を平然とやってのける、クレイジ
ーな人つて事だけだ！

絶対に僕が関わりたくない人No.1つて事だけだ！

以上で師匠様の説明終了。

話を戻そう。

「なんだそりゃ。まるで正々堂々（笑）じゃねえか。ならお前らは
試合中にも使うのか、卑怯な手を」

「ううん。試合は正々堂々闘うよ。試合に卑怯な手を使うのだけは、
絶対に駄目なんだつて（篠）」

「それしたら、わたし達は破門だもん。師匠様にボコボコにされて、

追い出されちゃうよ。それだけは死んでもごめん。多分、死ぬより苦しいもの(木)」

「死ぬより苦しいって……さすがに言い過ぎだろ」
すると二人は、ズイッと身を乗り出す。

僕の鼻に、二人の息がかかる。

「兄ちゃん、兄ちゃんは何も分かって無いんだよ(篠)」

「師匠様が怒る時、それは世界の破滅を意味するんだよ(木)」

「そうなのか？二人がかりで勝てたりできないのか？」

「兄ちゃん、考えて見てよ……(木)」

「ヤムチャが魔人ブウに勝てると思う？(篠)」

なるほど、分かりやすい。

それは絶望的だ

大陸がひっくり返っても、天地がひっくり返っても、ヤムチャがブウに勝つなんてあり得ないな。

非常に分かりやすいたとえだ。

「あ、そうだ」

二人声を合わせて、立ち上がる。勿論僕も立ちあがる。

こうして僕は、馬乗り状態から解放されたわけだ。

あー、楽になった。さすがに、二人は重いな。

「兄ちゃんに込み入った話があるんだ(木)」

「なんだ？お金関係の話以外なら、聞いてやる」

こいつらは、借りたお金を返さないからな。

僕はもう、六千円ぐらい貸しているが、全て有耶無耶にされている。

「違う違う。あたし達さ、今から友達の家泊まりに行くけど、良い？(篠)」

「別に良いよ」

僕はあっさり妹達の急なお泊まりを認める。

ダメ、と言う理由も無いし。いない方が、色々都合が良いし。

「案外、あっさり認めてくれるんだね。何か良い事でもあった？」

木」

「もしかして、彼女でもできたのお？（篠）」
「はあ。」

僕は心の中でため息を吐く。

こいつら、楽しそうだなあ。

こいつらみたいに生きれたら、気楽で良いんだろうけど。

「僕に彼女なんかできるわけ無いだろ。ほれほれ、行くならとつとと出ていきやがれ。僕は家で一人で楽しい時を過ごしているから」
一人で。

テレビ見たり、ゲームしたり。

いつもはリビング占領されてるからなあ。今日はゆったりできそう
うだ。

「じゃあ、行ってきまーす！」

二人は勢い良く外へ飛び出していった。

靴も履かず、荷物も持たず……。さっさと出て行けと言ったが、
靴と荷物ぐらいは持っていこうぜ。

まあ、大丈夫だろ。

アマゾンの放置しても生き残れそうな奴らだからな。

それより心配なのは、友達の家に迷惑を掛けないかが心配だなあ。
いきなり泊るなんて、やっぱり失礼だと思っただよなあ。

よし、明日か明後日にでもお礼の電話を入れておこう。

妹達に、電話番号をきいて。

僕はそう決意して、二階へと向かった。

制服から、私服に着替えるために。

二話 喰淵家の双子（後書き）

『あなたもひっくるめて、響子さんをお願いします』by五代裕作
今回はめぞん一刻！やっぱ五代君はかけーっす！

三話 錆ついた夜（前書き）

血が大好き みたいな人間がいたら軽く引きます。と言う訳で三話です。多分ですが、僕がこの状況にあつたら逃げだします。耐えられません。あ、この状況って本編読まなきゃ分かりませんよね。では、どうぞー。

三話 錆ついた夜

僕の家の近くには、店と言う店が一つも無い。
一番近い所で、セブンイレブンがあるが、自転車で二十五分はかかる。

しかも品揃えは悪く、特に僕の大好きな紅鮭の品ぞろえが悪い。
一週間に、二度見かけれない良い方だ。

だから僕達喰淵一家は、都市のスーパーで一度に食料を買い置きして、それを調理するつてのが大抵なんだけど。

「そううまくいかないのが、世間なんだよなあ」

と言う訳で、僕は自転車の籠にセブンイレブンで買ったおにぎりと綾鷹を入れた袋を入れ、ゆったりと二度目の帰宅をするため、自転車をこいでいるのだった。

品切れ。

私服、いや部屋着に着替えて、腹が減ったので何か料理を作ろう
と思い、冷蔵庫を覗くと、びっくり仰天。何も無かったのである。

何も無かったという表現は正しくないか。

あったのはバターとハウレンソウと、ベーコン。

ハウレンソウのバター炒めでも作ってやろうと思ったが、夕食に
しては足りないと思い、面倒臭いけれどわざわざセブンイレブンで
夕食を買った、と言う訳だ。

行きに二五分。

帰りに二五分。

現在、帰り道を十分ぐらいこいでるだろうから、合計三五分。
それに加えて、夕食を買っていた時間が十分、つまり四五分も経
っているのだ。

家を出たのが、七時だから、もう七時四五分だ。

夕飯にしては、遅すぎる。

腹は空腹を訴えて、もう既に臨界点を突破しようとしている。

自転車をこぐのが辛い。

かつてないほどに辛い。

いっそ道中で夕食を食べようかと思っただが、家で食べないと、なんだか食べたような気がしないので、必死で我慢しているのだ。

あー、今日はなにもうまくいかないな。

別に、他の日がうまくいってる訳じゃ無いけど、別段うまくいってない気がする。まあ、あくまで気のせいだが。

こうしている間にも、僕の自由時間が奪われているのかと思うと、なんだか腹が立ってきた。

腹が立つわ腹が減るわ、時間が経つわ時間が減るわ、人生ろくな事はないなあ。

とか、思っていた僕の視界に、何か変な物体が飛び込んでくる。

『何か』は百メートルぐらい先にあり、特に舗装もきれいな田舎道に、明らかに寝転がっていた。

酔っ払いか？

と僕は思った。

でも、こんな田舎に居酒屋なんてないんだよなあ。

都市に行けば、数えきれないほどあるんだろうけど。

とか、僕は呑気に考えていたのだ。

呑気に呑気に。

この後僕が目にするものが、酔っ払いなんかではないという事にも気付かずに。

『何か』は酔っ払いとは全く違う物だった。

自転車で近づくにつれて、その『何か』は正体を現す。

表して、現した。

その瞬間、僕は自転車を止める事もせず、自転車から飛び降りて、その『何か』に向かい猛ダッシュする。

自転車がどうなるうが、籠に入っていた夕食がどうなるうと、知った事ではなかった。

いや、僕は忘れていたのだろう。

自転車の事も、夕食の事も、勿論自分が空腹を訴えていたことすらも。

忘れて、無我夢中になってそれに向かいダツシユする。

そして駆け寄り、大声で呼びかける。

「大丈夫ですか!？」

そう。その女性は、全身血まみれで、左腕が?げ、絶命の危機に陥っている事が明らかかな状態で、道に横たわっていた。

大丈夫じゃない事なんて、目に見えていた。けれどそれをきいてしまうのが、人間なのだ。

「う、ぐっ、がはっ」

女性は、苦しそうに、もがくように、息を吐き出す。

とても喋れる状態じゃなさそうだ、と思っっている反面。

女性の顔を見て、綺麗な人だなあ、なんて不謹慎な事を考えている僕もいた。しかしそんな考えはすぐに消しさる。

僕が今考えなければならぬのは、この女性をどうしなければならぬかだ!

ここは田舎町。

病院なんて、一つも無い。

救急車を呼ぶか?

駄目だ。

時間がかかりすぎるし、そもそも家に置いてきているので携帯すら持っていない。

ならばどうする。

考えて考えて、考え抜いた結果。

くそっ、くそっ、くそっ!

何もできない!

僕には何もできない!

救急車も呼べない。呼べたとしても、間違いなくこの人は救急車が辿り着くまでに絶命するだろう。素人の僕が、治療なんてできるはずもなく、治療をする道具だってない。

僕にはこの人を救う事が出来ない！

何か、何か思い浮かべよ！

「うぐつ、げえっ！」

これは僕の嗚咽の声。

あまりにも見慣れない血だらけの女性を見てしまったという理由と、自分が何もできないという事を理解してしまい、僕は吐き気を催したのだ。

吐いてる場合か。

何か考えやがれ、僕の頭！

僕は確かに、疑り深い。

信賴している人間としか喋らないし、これからだってその生き方を変えるつもりはない。

だけど、だけどっ！

目の前で血まみれになって倒れている人間を、救わないような人間ではないっ！

あの時とは違う！もう僕は高校生なんだ！

考えるんだ、何か言い名案があるはずだ。

「お主……な、にをして……おるのじゃ……」

女性は言葉を発した。

妙に老人口調で。

掠れ掠れながらも、口を開いた。

しかし、この人はとても喋れる状態じゃない。

「これ以上喋らないでください！絶対に助けますから！絶対に、何が何でも！」

「……馬鹿を言うでない。お前こそ……儂、など捨て……置け。儂なら……大丈夫じゃ。お主は……良いからこの場から離れよ……」
沸々と何かが沸いてきた。

この気持ちは、なんだ。

分からない。解らない。判らない。

けれど僕は、この人に多分。

「ふざけないでください！こんな怪我人置いて逃げるなんて、できるわけ無いじゃないですか！あなたは僕が絶対に助けます！だからこれ以上もうしゃべらないでください！」
怒っているんだ。

こんなにも必死で考えているというのに。僕は、この女性を生かす方法を必死で考えているのに。それこそ、死に物狂いで考えているというのに。なのにこの女性自身が、生きる事を諦めている。

それが、ムカついてたまらないんだ。

「お主は……儂を助けて……くれるのか？」

女性は僕に尋ねる。

「助けます。何がなんでも」

僕はそれに答える。

「嘘じゃ、なくて……？ほん、とうに？」

女性は先ほどとは、打って変わって、哀願するように助けを求め
る。

「だけど僕の答えは、結局一つだ。」

「当たり前です。僕があなたを助けられないで、他に誰があなたを助けるんですか」

僕はこの人を助けるのだ。

拒否しようが、哀願しようが、僕がこの人を助ける事に変わりはない。

「なら……儂を連れていけ」

女性は確かに、連れて行けと。そう呟いた。

「何処にですか？」

「……え」

「え？」

聞き取れずに、もう一度ききかえす。

これは僕の失敗だった。ただでさえしゃべる事が辛い彼女に、もう一度喋らせなければならぬなんて。

僕がきちんと聞いていれば。

「僕を……お主の家へと連れて行け……」

「え？」

「こんどは、質問のえ？ではなく、驚きのえ？だった。」

「女性は、病院ではなく、僕に家へと連れ行けと言ったのだ。」

「あれは……お主の自転車じゃな」

「切り落とされていない、もう片方の腕で、女性は僕の自転車を指差しました。」

「は、はい。そうですけど」

「しかし、僕が驚くのはまだ早かった。」

「この後女性は、とんでもない事を言い出したのだ。」

「あの自転車の……籠に、僕を……乗せて、お主の家まで運べ」

「ぼくはただただ、圧倒される事しかできなかった。」

「この後の結末を言うなら、僕はこの女性に更に驚かされる事になる。」

「間違いなく。」

「僕の運命はこの女性によって、捻じ曲げられて、壊された。修復不可能なぐらいに、粉々に壊されていた。」

「この時点ではそうではなかったのかもしれない。いや、この時点でもう、壊されていたのだろう。」

「出会った時から、僕の運命は壊されていた。」

「でも僕は、それが悪い事だったとは、決して言わない。」

三話 錆ついた夜（後書き）

『 跪けッ！ 』 by バラライカ

BLACK LAGOONのバラライカ様です。どうしたら、こんなに格好良くなれるのだろうか。ビシッと一言跪け。バラライカ様大好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0188z/>

神喰 - カミクイ -

2011年12月2日00時45分発行